第3章　コミュニティ形成の諸条件
：社会関係調査への序論

はじめに

「町おこし」や地域活性化が俎上に上るとき、しばしば「コミュニティの再生」が唱導される。そこには前提として、ある時点で再生するためのコミュニティが実在し、そしてあるとき破壊され、現在は壊滅の危機に瀕しているという認識がある。さらに述べれば「町おこし」を必要とする状況、つまり町が比喩的には倒壊しつつあり、地域の社会経済的活動が停滞している状況を説明するためにはコミュニティの崩壊ということに一元化するのが一見、分かりやすい。確かに日本各地において商店街は衰退し、隣近所の関係は希薄になり、凶悪犯罪は頻発し、弱者が危険にさらされ、教育は荒廃し、若者は働く意欲を失い、自殺や過労死がが増加している。さすがに全ての社会問題の背景にコミュニティの崩壊があるとまでは言わないにしても、コミュニティの再生によってそれらの問題が解決すると一般に思われているのは事実である。しかし、本当にそのようなコミュニティは実在し、また崩壊したのか、そして再現可能なのだろうか。このような問題意識にもとづき、コミュニティ形勢の諸条件について考察し、その後に実行する予定の社会調査のための理論的・概念的基盤を提供するのが本論の目的である。

コミュニティないし共同体とは家族と社会の中間的な集団カテゴリーであり、何らかの特性をその構成員が共有している集合単位である、と仮に定義しておこう。「仮に」というのは、ここで考察したいのはコミュニティ概念の曖昧さそのものであり、この定義自体が以下の考察のうちに再考されてゆくべき過程の出発点に過ぎないからである。このように断った上で、以下ではコミュニティをめぐる場所、帰属、そして境界概念について焦点を合わ

せてゆく。というのは現代のコミュニティのもつ場所（地理的範囲）の意味が以前とは大きく変容しており、また諸個人の帰属性＝アイデンティティも多様化そして多重化し、両者の結果としてコミュニティの境界が不確実なものになっているとの自覚による。また、モデル的な段階区分として伝統的、近代的、現代的コミュニティという3段階を想定する。

1　伝統的コミュニティ(1)

伝統的コミュニティは基本的には農業を中心とする村落共同体であり、したがって農村という土地に根ざした明確な場所性がある。その地理的範囲は構成メンバーが互いに直接顔見知りになり、また地理環境も把握できる程度に小さいが、他方では人口も土地も一定の自給自足性を持つ程度には大きい規模の単位である。交通手段の未発展、ないしは地形等の自然条件による限界という閉塞性をもつ。しかし例えば隣村にも行けないというほどの地理的閉塞では持続し得ないので、一定の開放性はこの種のコミュニティにもある。だからといって往来の自由は必ずしも保障されていない。複雑な伝統的慣習によらなければ帰属先を変えることが困難だからである。伝統的コミュニティでは生産手段としての土地と日常生活の空間が一致しており、帰属とはそのまま生存を意味するだけに帰属に関する規制が非常に強い。村落であるからには必ずしも縁戚のみの関係ではありえないが、何村の何某というように土地と個人アイデンティティの結びつきも強固である。帰属先のコミュニティは出生によって固定され、婚姻による帰属先の移動も伝統的様式によって固着されている。このような伝統性の

(1)前近代的、あるいは封建的コミュニティ（ないし共同体）といわずに「伝統的」というのは、前近代とか封建という概念には資本主義が対概念として必然的に考慮されるので、それに伴う混乱を意識的に避けている。大塚（2000）は「アジア的」→「古典古代的」→「ゲルマン的」という段階で農業共同体の発展段階を説明しているが、中世（つまり前近代）のあいだに資本主義の基本条件はすでにととのっていた（飯田2006など）との見方もある。

中では集団の「内と外」との境界は明らかに現実的であり、コーエン（1985）の言うような「象徴的（symbolic）」なものではない。なぜなら、伝統的コミュニティは他者との境界を必ずしも前提としなくても、種々の物理的・文化的境界によって成立しうるからである。境界の象徴性が重要になるのは近代的コミュニティにおいてである。

2　近代的コミュニティ

近代的コミュニティは基本的には資本主義的工業化以降のコミュニティを指すので、その対象は通常は賃金労働者である。そしてここでの場所は端的にいって都市である。そして居住空間と労働空間は機能的に分離されており、その間を何らかの交通手段が結んでいる。このような場所の分割は生産と消費における規模の経済を発達させる一方で、コミュニティの形成を分裂的なものにする。つまり居住地域における消費者としての生活圏と、職場における労働圏という複数の場所が生じるのである。生活圏と労働圏がそれぞれ大規模化と分業を発達させた結果、生産者と消費者が互いの顔が見えないため、それぞれの活動を極端化させられる（つまり、身内に対してであればできないような生産・消費行動）。それでは伝統的な場所は解体したのか。

近代的コミュニティという概念が使用されるパターンは大別して二つある(2)。一つは伝統と近代を対峙させるなかでコミュニティを伝統制の側に置き、近代化の犠牲という形式で、コミュニティを近代化という悲劇のヒロインのように描くものである。この考えではコミュニティの本質は伝統的コミュニティにあり、これを分解するものとして近代化がある。つまり、小規模集団である村落や都市部における地縁共同体が、都市化・工業化とともに土土地と労働を、居住空間と労働空間を、公共生活と個人ないし家族生活を分離したという。この立場から見れば、コミュニティは

(2) この段落の記述についてはデランティ（2006）参照。

前近代的遺制であり、近代的諸社会制度の拡充とともに解消されてゆくべきものである。それに相当する用語には因習、風習、迷信などがある。近代以降の社会科学的研究のリベラル的潮流には、近代化批判の裏返しとして、このような前近代への郷愁が内在している。例えばウェーバーにおける「鉄の檻」、ポランニーにおける「悪魔のひき臼」などの近代批判に通底しているのは、人間性の重要な部分である非合理的・非経済的な組織が近代化によって解体され、さまざまの問題を起こしているという論点である。

いま一つの用法はコミュニティも近代化の産物としてとらえ、近代化によって変形しつつも決して消滅するものではないが、同時に前者ほどには肯定的にとらえないというものである。この立場はそのような郷愁的コミュニティが現実にはどの時代にも存在しなかったことを指摘するところからはじめる。コミュニティについてバウマン（2001:1-3）は、この「心地よく」、「暖かい」、「人を信頼できる場所」を感じさせる語が結局のところ「残念なことに今は手の届かない、しかしそこに住むこと、それを回復することを希求するような世界」を指す、つまりコミュニティとは「失われた楽園、または見果てぬ楽土」だと述べている。

近代コミュニティの場所は国家によって伝統コミュニティを模して再構築されたというべきである。近代的国民国家では、いわば第三の場所として国家という空間が措定される。アンダーソンの『想像の共同体』（1997）で描かれたように、中央集権的国家組織はツリー上の組織によって効率的な場所の管理を確立する。そして、その指揮命令系統を通じて集団への帰属心（愛国心、愛社精神、故郷愛など）を高める施策がとられる。戦時中であれば総動員体制下において参謀本部から隣組に至るような管理体制、戦後であれば産官の保護主義的な振興がのもとに組織化、糾合化される。バウマンのいうようなユートピア的なコミュニティが喧伝されて個人を絡め取ってゆくのである。そのような想像上のコミュニティへの献身はフロム（1941）が「権威主義的」性格として指摘したような自発的服従を促すのであり、それは軍隊においては玉砕、企業においては過労死というように、自己犠牲を美徳

とすることにより、諸個人から最大限の献身を搾り出そうというものである。

コーエン（1985）のいう象徴的境界もここで積極的な意味を持つ。つまりコミュニティの敵が存在することで、この敵に対抗する中から境界が意味づけられ、内的秩序を維持し、異分子を排除することができる。異分子が実際にコミュニティにとって脅威であるかどうかは実は二次的な問題である。異分子排除はコミュニティ成員間のダイナミズムによって生ずる。つまり「お手柄」を上げることで集団内の地位・自由度が上がる。同時にその「お手柄」への報酬が払われれば内部の階層秩序が安定する。集団内での地位の維持には、どれだけ集団に貢献して「ただ乗り」を許しているかが鍵になる。いつまでも「ただ乗り」を許しておくわけにはいかないので、その意味では「権力」には自己破壊傾向が内在する。したがって、近代的コミュニティは一定の間隔で異分子排除と地位の変動を起こして、中下層の成員が集団に貢献する必要がある。その機会が愛国心や異分子排除の機運として発生するという見方もできる。

3　現代的コミュニティ

都市を結びつける高速移動手段は世界を小さなものに感じさせ、IT技術の発展はコミュニケーションを地球規模で瞬間的に可能にさせた。ハーヴェイ（1999）は、これを時間－空間の凝縮（time-space compression）と呼んでいる。職場の同僚や上司よりもウェブ上のチャット仲間に多くの相談を持ちかけ、アパートの隣人と会う機会よりも、海外の友人と会う機会のほうが多いというような事態が生じている。直接的な接触が少ないため、ここで出来上がるのは「薄い」コミュニティ（デランティ 2006 239）である。これは近代郷愁派の「モラル・コミュニティ」的な規範的役割は期待できないものの、そのような電子空間上の遍在的ネットワークがグラノヴェッター（1995）の「弱い紐帯」、あるいはコールマン（2006）の社会関係資本として、一種の情報資源とし

ての役割を果たしている可能性は大きい。「場所は個人の人生の外的な準拠点としては以前ほど重要なものではなくなっている」(ギデンズ 2005: 166) というのは確かである。しかし一方で近代の生んだ国家の枠組という場所性を克服するものは限られている。「薄い」コミュニティの中で紐帯を維持できる者の有利性は疑う余地が無い。情報革命はIT関連機器の普及を助けたが、どこまで利用が可能で、あるいは必要に応じて自分自身も移動して交流を深めるというようなプロセスまで考慮すると、ハーヴェイ的な凝縮度の違いが社会階層となって表出することも考えられる。

運命共同体としてのコミュニティは消滅しつつあり、主体的に選択して帰属するような共同体が勃興している。ウェーバー (Weber 1978: pt.2, Ch. IX) は非自発的な「運命の共有 (Life Fate)」が身分集団形成の条件だとしたが、それだけでは不十分になっている。これまでの民族集団や国家や企業への帰属性に加えて、近代的コミュニティでは省みられてこなかった地域や趣味を基盤にした集団形成がおこっている。ここでの一般化は多面性・多重性であって、しかも優先順位も個別に異なっている。しかしそうなると、多重的帰属性を共有する本来的な共感というのは得難くなり、再びフロム (1941) 的な孤独からの逃走としてのファシズム、自由の放棄という筋道を辿っているのではないかとの懸念がある。一方で多角的自己の存在を得ることにより、孤独は癒されないにしてもユニークでありたいという欲求を満たすという点ではポスト・モダン・コミュニティは肯定的に考えていいかも知れない。

しかしながら近年の象徴的境界の現出形態をみると、多分に権威主義的な傾向が強くみられる。これは上記の階層化と合わせて考えると、下層におけるストレスと不満の横溢現象という背景がある。冒頭に述べた現代社会の諸問題もまた、伝統的コミュニティの崩壊が原因というよりはポスト・モダン・コミュニティの本質的な矛盾の現出ではないか。つまり大塚 (2000) がウェーバーを解説していうような内的平等と排外主義の並存が、内外の境界の曖昧な状況で存在したときに、多くの混乱と喪失感があるので

はないか。

4　研究方法

ここまでの考察をまとめると以下のようになる。すなわち近代化はその技術的·文化的含意において、前近代的共同体を解体したというよりも自己の都合に合わせて変容させつつこれを維持してきた。我々の眼にしているのは、そのように近代化に補完的に形成されてきた近代的コミュニティの崩壊と、「弱い紐帯」を中心とした緩やかな現代的コミュニティの普及なのである。つまり現状において基本的には2種のコミュニティ参加形態が並存している。そして誰がどちらの参加形態を選択するかはある程度推測可能である。

コミュニティ選択を決定条件の第一は世代であろう。「おそらく、現在の若い世代は、上の世代に比べて［コミュニティへの］参加が減っているというのではなく、むしろ新しい方法で参加するようになったのではないか」（パットナム 2006: 24）。つまり参加の度合いは減少しておらず、世代によって参加する先が変わっているのだとする。

第二には信条との関係が推測される。個人主義か集団主義かというような信条と、集団への帰属のありかた（質·量の両面で）には因果関係があると推測される。また構造的要因として住居の形態（持家か賃貸か）や家族·子供の在·不在、性別、職業なども影響してくるであろう。

本研究では、まず公開データの予備分析によって上記のようなコミュニティ形成の諸条件を搾り出し、これに続く第二段階における地域社会の実態調査へ向けての準備段階をなす。そして第二段階においては、パイロット調査と本調査（標本調査）を大東文化大学を中心とする板橋区において実施する。質問項目や方法はJGSS（日本版総合的社会調査）に順じつつ、コミュニティ関連の質問を拡充し、データを取得する。データは個人情報の抹消を条件に公開することを目標とし、担当者以外の研究者の分析にも

資することができるようにする。

本研究の意義は一義的には、いかなるコミュニティにどのような人間が参加しているかを理解することである。また、そのために諸コミュニティの性格や分類についても新しい知見を獲得することができるだろう。パットナム（2006）の研究はコミュニティ研究であるにも関わらずアメリカ全土を対象にしていた。本研究はあくまでも限定された地域の調査を目標とする点で、彼の研究以上の成果を目指すものである。

参考文献

1. アンダーソン、ベネディクト／白石さや・白石隆訳『増補　想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年。
2. 飯田恭『共同体の基礎理論』を読み直す――共同性と公共性の意味をめぐって―― 共同体の「ゲルマン的形態」再考 ― 静態モデルから動態モデルへ』政治経済学·経済史学会2006年度春季総合研究会、2006年。
3. ウェーバー、マックス［Max Weber］ *Economy and Society*, ed. By G. Roth and C. Wittich, UC Press. 1978年。
4. 大塚　久雄『共同体の基礎理論』岩波現代文庫〔初版1955年〕、2000年。
5. ギデンズ、アンソニー／秋吉美都、安藤太郎、筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティ――後期近代における自己と社会』ハーベスト社、2005年。
6. グラノヴェッター、マーク［Mark Granovetter］ *Getting a job : a study of contacts and careers*. 2nd ed. Chicago : University of Chicago Press. 1995年。
7. コーエン、アンソニー・ポール／吉瀬雄一訳『コミュニティは創られる』八千代出版、2005年。
8. コールマン、ジェームズ／久慈利武訳『社会理論の基礎』青木書店、2006年。
9. デランティ／山之内靖、伊藤茂訳『コミュニティ―グローバル化と社会理論の変容』NTT出版、2006年。
10. ハーヴェイ、デヴィッド／吉原直樹訳『ポストモダニティの条件』青木書店、1999年。
11. バウマン、ジグムント［Zygmunt Bauman］ *Community: Seeking Safety in an Insecure World*. Cambridge, UK: Polity Press. 2001年。
12. パットナム、ロバート・D.／柴内康文訳『孤独なボウリング―米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房、2006年。
13. フロム、エーリッヒ／日高六郎訳『自由からの逃走 新版』東京創元社、1941－1965年。
14. ポランニー、カール／吉沢英成訳『大転換―市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社／1975年。